広島大学教育学部紀要　第二部　第44号　1995

スポーツ科学論序説（II）：イメージの生成

－わが国におけるスポーツ科学の誕生－

樋口　聡

（1995年9月11日受理）

Prolegomena toward a Philosophy of Sport Science (II) :
Generation of Images: The Birth of Sport Science in Japan

Satoshi Higuchi

(1) The discourse concerning sport science makes the images and/or myths of sport and science begin to work.
(2) The term *supōtsu-kagaku* or sport science publicly appeared in 1960s in Japan. We can find, however, the scientific attention to sports or physical movements already around 1900. A remarkable organization of the knowledge of sport science was realized in 1930s at the National Institute of Physical Education. The main research of the science was sports medicine, so the sport science used to be a field of medicine at the dawn of research in 1930s.
(3) In Japan, the conception of *taiiku* or "physical education" has been an ideal regarding so-called physical culture including sports ever since the culture was introduced from abroad. The field of sport science was born in the genealogy of the research of physical education. In the development of sport science, the idea = ideology = illusion of "physical education" is active to this day.

1．本稿の位置

本稿は,「スポーツ科学の本質や意義に関する哲学的考察」を意味する「スポーツ科学論」に向けての，一連の序説の第二論考である。先の「序論」を振り返れば，問題提起としての序説の第一の基点として本稿では「科学」に対するイメージの問題が取り上げられることになっている。序論では，スポーツ科学の背後にある科学に対するポジティヴなイメージが示唆され，一方，科学論の諸研究によって，そのような科学に対するイメージが啓蒙主義的な科学観によるものとして相対化されるべきことが指摘された[1]。

本稿では，まず，われわれの身近にあるスポーツや科学を取り巻くイメージと神話について語ってみよう。その際，おそらく「体育」という教育なり現象なり思想なりが，スポーツや科学にまつわり付くように出没するに違いない。そのようなイメージや神話が，スポーツや科学に対するわれわれの見方や考え方を束縛しているとすれば，まずはそのあり様を摘出してみることがスポーツ観や科学観の相対化のためには有効であろう。そして，そのようなイメージの生成が昨日今日に起こったことではなく，或る程度の歴史的な蓄積なり伝統なりをわれわれが引き継いでいることを思えば，イメージの生成という視点から，われわれが今手にするスポーツ科学がどのような歴史的系譜を辿ってきたものなのかを観察してみることが，科学史を含んだスポーツ科学論の方法として措定されることになる。

2．スポーツ，科学，あるいは体育のイメージと神話

ここに見られる「スポーツ，科学，あるいは体育」という表記に，或る種の違和感を覚える人は少なくないに違いない。これら三つの概念のカテゴリーの相違を思えばこのような語順のほうがその違いを示すことになって妥当なのであるが，関係者のみならず一般の多くの人々にとっても，むしろ「体育，スポーツ，科学」といった語列のほうが語感として落ち着いた感じ

を与えるであろう。それは「体育スポーツ科学」という熟語に直結する。このことは体育とスポーツの間の因縁を象徴しているのであり，それは体育やスポーツに対するわれわれのイメージを規定し続けている。

木下によれば，明治以降大正の後半まで，外来のsportに対する「スポーツ」というカタカナ表記は一般に普及したかたちでは存在せず，その結果，sportという運動（競技）を教育的に価値あるものとしその地位を高めようという意図などによって，「スポーツ」と呼ぶべき運動競技を「体育」と混同させていく事態が生じたという[2]。そこには，本来的な教育概念としての体育，そうした関係としての体育をスポーツなどの運動と等値と考える実体化，そして，スポーツは単なる運動競技であるが教育的な装いを施すことによってその価値が高められるのではないかという期待，を見て取ることができるが，そのような事態は現代においてもほとんど同じように観察されることがらであろう。したがって，多くの人々の常識においては「体育・スポーツ」というカテゴライズは何の不思議も生じないのである。もっとも最近では教育という価値付けが必ずしも有効ではないために，スポーツに対しては新たに芸術などの文化的価値を付与しようという試みがなされたりしている[3]。スポーツを価値あるものと位置づけようという絶えざる欲望の現出という側面を，「スポーツ科学」という営みと言説は確かに有している。

さて，体育とスポーツが絡み合って生み出しているイメージの一つに次のようなものがあるだろう。評論家の佐藤忠男が語っていることである。

> 「私がよく散歩するコースに，ある大学のある体育クラブの合宿がある。そこでちょいちょい，下級生たちが上級生たちから土下座させられて説教されている。学校の体育部が上級生に対する絶対服従という封建的な思想教育の温床であることは昔からのことであるが，いっこうに改善されるきざしはないようである。体育クラブの学生たちに根強いその封建性は，たんに若さゆえの愚行というのではなく，体育専門家たちに根強い傾向のようである。[4]」

ここで描写されている「体育クラブ」とは，おそらくラグビーや野球などのスポーツクラブのことであろう。上級生に対する絶対服従，土下座などという封建性が，競技スポーツクラブに対する根強いイメージの一つであることは，この文章が書かれた二十年前も今もさほど変わっていないかもしれない。いわゆる「体育会系」などといって，むしろそのイメージは強化されて定着しているようである。しかしながら，その当事者たちからはおそらくすぐに反論が提出されるに違いない。二十年前はいざ知らず，今はそのような封建性は改善されもっと民主的になっているとか，かつて見られた悪しき野蛮さは合理的な練習方法や科学的なトレーニングに変わりつつあるといった反論である。そのような反論とは裏腹に，筆者はこのようなスポーツのイメージの生成の背後には，日本的な思想風土のダイナミズムが潜在していることをかねてから感じている[5]。上の佐藤の見識は或る意味ではやはり先入見なのであり，「体育クラブの学生たちに根強いその封建性は，たんに若さゆえの愚行というのではなく，体育専門家たちに根強い傾向のようというのでもなく，日本人的な気質の典型的な表れなのだ。スポーツを取り巻く環境が科学化されてきた今日，この種の体質がいまだに観察されうるのは，むしろ例えば或る種の日本＜企業＞であり或る種の＜政治団体＞であり或る種の＜宗教団体＞であろう」などと付け加えなければならないのである。

いずれにしても，封建性，野蛮といったことがらの対極に科学的といったイメージが形成される。スポーツ科学の繁殖力の一つがここにある。しかし，後で見るように，スポーツを科学的に解明しようとする試みは通常思われている以上に早い時期（戦前）からなされているのであり，スポーツ科学が発展・普及すればスポーツ界の封建性や野蛮さは払拭されるなどという神話は簡単には成立しない。この種のイメージの現出が日本人的な気質に基づく根深いものであるとすれば，そして，実際にどうであるかということよりも，多くの人々がスポーツにそのようなイメージを付与しておきたい，スポーツをそのようなものとして理解しておきたいと思うようにする隠された力がその背後にあるとすれば，関係者がいくら力説しても，そしてスポーツ科学がいくら進歩しても，上記のスポーツ科学神話が容易に成立しないのは当然であることになろう。

今あるスポーツの姿に安易なイメージを付与したり理不尽な神話を作り上げて，スポーツをそのようなものとして理解し安心しようとする傾向が，われわれには多かれ少なかれある。それは時代の古さとか世代の新しさなどともほとんど関係がない。それにはマスコミの影響や力を見逃すことができないが，筆者のまわりにいる大学競技スポーツに励む現代の新人類と言われる若者達は，自分達のスポーツクラブのアイデンティティの確認のために，明治時代からずっと使われて来ている「体育会」という何とも古式ゆかしい名称を使用することをはばからない。むしろ彼ら彼女らは「体育会」を愛してもいさえするのだ。

今あるスポーツのスタイルを相対化するエピソード

としては，次のような今村嘉雄の文章を挙げることができる。それは1960年に書かれた「漫才化したスポーツ」という辛辣なスポーツ批評である。

「スポーツに発声はつきものであるが，応援団のそれは別として選手の発声は，その場その時の雰囲気に応じて，ごく自然になされるのが一般であって，特に「訓練」された発声というようなものは，最近までは聞かれなかった。ところが最近になってバレーボールの練習や試合に「訓練」された発声が盛んにつかわれるようになった。アマ・プロスポーツを通じて，今日最もノイジイなスポーツはバレーボールではなかろうか。・・・何ともわけのわからない声を主将が余韻嫋々・・・と張りあげると，他のプレヤーがこれに応じて，また訳のわからないドラ声を一斉に張りあげる。これを何回かくりかえす。相手のチームも似たようなことを「われ劣らじ」と繰りかえすので，一種の「かけ合い漫才」の観がある。・・・素人目で見ると，これらの動作や，発声はキビキビしてよく統制がとれているので，いかにも訓練の行き届いたすぐれたチームであるかの如き印象さえうける。このようなことは終戦前には全く見られなかったことである故に戦後の一つの奇現象である・・・[6]」

「チームを強くするには声を出していこうぜ」などという迷信が，スポーツ科学がそれほどさかんでなかった戦前では存在していなかったが，二十一世紀を迎えようとする科学時代の今日では日本中津々浦々にまで浸透しているのだ。バレーボール関係者のみならず野球をはじめ多くのスポーツ指導者，選手たちは，上記の発言に眉をひそめることなかれ。この発言者今村嘉雄とは，東京教育大学の体育学部長まで務めた，知る人ぞ知る体育学の大家なのだ。

時代とともに体育も変わりスポーツも変わり，そして科学ももちろん変わった。しかし，それらをめぐる変わらないイメージや神話があり，それらの変化を見えにくくし，あるいは隠蔽さえしていることがある。われわれは，そういったイメージや神話をとりあえずは宙吊りにする努力をしてみよう。それがとりあえずであるのは，バルト[7]が指摘するとおり，現代の神話はすぐに新たな神話を生み出すからである。そのような視点のもとでは，例えば教育である体育については，運動とか実践といった規定をとりあえず中止して，先の佐藤の体育＝スポーツ体質の非難にあったように，「体育」を基本的には一つの＜思想＞として徹底的に扱ってみるといった試みが考えられるだろう。また，スポーツについてはすでに社会的な現実が先行しているように，スポーツをいわゆる「体育人」の手から解放してやることなどが発想されるであろう。そして，科学については，『科学見直し叢書』（全4巻，木鐸社，1987-1991）の刊行のことばが，そのままスポーツ科学にも投げかけられなければならない。すなわち，「科学とその技術的応用は本来善なるものであり，科学知識の客観性とその累積的な進歩性は疑ってみるまでもない，と長い間信じられてきたし，現在もなお信じられている。こうした科学観は，学校教育や科学の普及書を通じて継承され，科学者養成制度の中で拡大強化されてきた。・・・科学知識と迷信や俗信との間にどのような境界線を引くことができるのだろうか？科学知識はどのような過程を経て生産・伝達されるのだろうか，また科学者集団の構造にはどのような特徴があるだろうか？・・・そもそも，科学とは一体何なのか？」

ともあれ，われわれは以下において，わが国における体育とスポーツの絡み合いと科学的な知の編制の歴史の一齣を垣間みることによって，イメージの生成の過程を考察してみることにしよう。

3．スポーツ科学の誕生

「スポーツ科学」という言葉は一体いつ頃から使われているのだろうか。『新修体育大辞典』（不昧堂）によれば，わが国においてスポーツ科学という語が用いられるようになるのは，日本体育協会のスポーツ科学研究所の前身であるスポーツ科学研究室が設けられた1961年頃だという。この年代からすぐに思い至るのは，1964年の東京オリンピックであり，それに向けてのスポーツ科学の発展である。

1965年から66年にかけて，『スポーツ科学講座』（全10巻，大修館）が出版されるが，それを記念して「スポーツ科学の現状と将来[8]」と題する座談会が『体育科教育』誌上でなされている。この座談会には，『講座』の企画・執筆との関わりで，猪飼道夫，石河利寛，小野三嗣といったスポーツ医学，生理学の研究者に混じってスポーツ社会学者の竹之下休蔵も出席しており，司会も含めて9名という大人数でいろいろな話題をそれぞれに論じ，座談会そのものは散漫なものに終わっている。その座談会のレポートから読み取れるのは，東京オリンピックがスポーツ科学の発展を促進し，トレーニングやコーチングの経験主義の壁がスポーツ科学によって破られ，それがスポーツの成績や記録の向上に貢献し，それに伴ってスポーツ科学という考え方が一般化してきたといった認識である。そのような見解からすれば，わが国におけるスポーツ科学の誕生はやはり東京オリンピックを機軸とした1960年代だというこ

とになるのだろうか。そのような物語が，おそらく一部で確かに信じられているに違いない。

しかしながら，東京オリンピックの思い出として多くの人々の脳裏をかすめるのは，そのようなスポーツ科学誕生物語ではなく，大松監督に率いられた東洋の魔女の常軌を逸したハードトレーニングの根性物語や，後に「もう走れません」と遺書を残して自殺した円谷幸吉の，科学のイメージとはほど遠い悲哀の漂う走る姿であったのではないか。確かにここに全10巻にも及ぶスポーツ科学講座がまとめられはしたが，それは一般にはほとんどの人々の知る由もなく，その後もそして現在も例えばマスコミが一般向けに繰り返すように，「ようやくスポーツの世界にも科学が取り入れられるようになって・・・」というスポーツ科学の誕生の＜兆し＞が絶えず語られ続けて来ているというのが現実ではないだろうか。そのようなスポーツと科学の一般的なイメージからすれば，スポーツ科学は1960年代どころか未だに誕生さえしていないということになってしまうだろう。

それとは全く逆に，座談会の席上，猪飼は「スポーツ科学というものは，けっして新しいものじゃないと思う」と述べている。織田幹雄といった昔のメダリストの練習法は実に合理的で，そこにすでに科学的なトレーニングの実際は見出すことが可能であり，ただそれがこの『講座』におけるように系統立てられるようになったにすぎないというのである。とすれば，内容の深まりや程度の差はあれ，1960年代以前にもすでにわれわれはいわゆるスポーツ科学の手法や成果を手にしていることになる。このことは，この座談会の出席者全員が多かれ少なかれ共通に感じていることであり，それは要するに「体育学研究」という土壌に関わるものである。「スポーツ科学の現状と将来」を語る座談会も，後半においては「学校体育とスポーツ科学」の話へと進むのであり，ここにスポーツ科学の性格の一端が表れているに違いない。わが国におけるスポーツ科学の成立や発展を考える際，「体育」の理論や研究や学問のことをまずは見る必要があるのである。

(1) 体育学研究という土壌とまなざし

体育という身体教育にせよスポーツという運動競技にせよ，わが国にとっては外来の文化であり，それらを初めて移入した人々にとって，それらがいかなるものであるかをまずは理解し，その理解に基づかない限り，それらを実践してみることも，ましてや普及・発展させることもできないことは言うまでもないことであろう。その意味では，わが国が近代化を国策としてとった明治の初めから，すでに体育などに関する理論，研究の萌芽はあった。当時の体育をめぐる問題の中心は，何と言っても教育であり，教育令や学校令のもとでの「体操」という教科の背後には，兵力のための国民の体格・体力の向上・増強という使命があった。1878年に「専ラ體育ニ関スル諸學科ヲ教授シ以テ本邦適当ノ體育法ヲ選定シ且體育學教員ヲ養成スル」ことを目的に体操伝習所が設置される。それが1886年に東京高等師範学校の体操専修科となるのであるが，学校の沿革としては，この伝習所が，現在のわが国におけるスポーツ科学研究の拠点である筑波大学体育科学系の起点である。

この明治11年の体操伝習所設立に関する公文書において「体育」という用語の統一的使用が見られ，「体操」という語との矛盾をはらんで並立的に使用されながら今日のわれわれの「体育」につながるような概念とイメージが形成されていったことを，木下の研究は明らかにしている[9]。本来の知育・徳育・体育といった三育思想に由来するいわゆる全人教育に寄与する体育という理念的なイメージが，おそらく今日のわれわれの「体育」概念の背後にはずっと潜在しているに違いない。したがって，体育を運動やスポーツに直結させてしまう実体化も，逆に見れば運動やスポーツを体育という理念的なイメージによって正当化する試みであったのだ。その試みは，学校の沿革のみならず，すでにこの体操伝習所の設立から始まっているのではないか。設置者の意志とは無関係に，「専ラ體育ニ関スル諸學科」はこの理念的なイメージにかなうものを貪欲に吸収して膨張していく。その結果が今日の「体育学」である。体育はスポーツをその理念のもとに置くことに成功したために，体育学はスポーツについての理論や研究をスポーツ科学といった知として編制することに成功しえたのである。このような「体育学」といったまなざしのもとではじめて，体育学研究の歴史と発展が語りうることになる。スポーツ科学の起源もまたそこに見出すことが可能である。

体育学の，そしてさらに体育史といったまなざしのもとで，例えば『近代体育スポーツ年表』(大修館，1973)も編まれている。それによれば，体操伝習所などといった国立学校の設置とは無関係に，そしてそれに先立って，1871年（明治4年）の暮れに「東京芝増上寺後方の芙蓉弁財天の池に氷が張り，人々氷上をすべる。外国人もすべり，見物人も多数」であったことが記載されている。わが国におけるスケートの起源とでも言うのだろうか。同じように，外来の陸上競技，野球，ボートなどの紹介と，当時の学生たちのスポーツへの取り組みが体育・スポーツ史として語られている。体操伝習所といった学校の設置と，東京大学などの学生たち

のスポーツへの取り組み，そして体育という思想へのスポーツの吸収といった事態が，すでに明治の数十年間において達成され，その結果，スポーツの理論・研究・学問という基盤が形成されたとみることができるだろう。明治の末の体育の研究書はすでに多彩なものを含んでいる[10]のであり，体操の理論書などに加えて，例えば，陸上競技の理論を解説した武田千代三郎の『理論實験競技運動』（博文館，1904）や大森兵蔵の『オリンピック式陸上運動競技法』(運動世界社，1912)なども出版されている。大森は，近代スポーツ競技の紹介者であり，最初のスポーツ留学生で，アメリカ・スプリングフィールドのYMCAトレーニング・スクールを卒業した人である。その内容はともあれ，すでにこの明治の後半の1900年頃には，スポーツの合理的で効率的な実践を志す科学的なまなざしが存在していたと考えられるのである。

このように体育学研究といった土壌においてスポーツ科学の誕生と展開を考えることができるとすれば，すでに指摘されているように，その歴史的な経緯には重要な二つの年がある。一つは，わが国で初めての国立の体育の研究機関，体育研究所が設置された1924年（大正13年）であり，もう一つは，戦後，日本体育学会が設立された1950年（昭和25年）である。

(2) 体育研究所の夢

高等師範学校などの教育機関とは別に，国立の体育の研究所が設立されたことは，体育の研究からスポーツの科学へと至る道筋を考える上でやはり重要なことである。国立の体育研究所をつくる計画が早くからあったことは既に明治三十年代の予算案や日露戦争後の議会での答弁によって知られる[11]という。当時の体操遊戯取調委員であった井口あくりらも，国立体育研究所を設置すべしとの熱い主張をしている。それによると，国民体軀の改善発達を図ることが国家百年の長計で，最も必要なことであり，それを民間の不完全な設営に放任してはならないという。そして，本研究所の事業は直接には学校体育にあるが，間接的には民間体育の奨励発達にも寄与するものであるという[12]。

一方，東京高等師範学校内に設けられた東京体育学会が編輯する雑誌『體育と競技』において，学会主事の數川與五郎は，井口らの主張とはかなり趣を異にした希望を国立体育研究所の設立に対して表明している。數川は，当時の体育界の状況を実に混沌としていて何等の定見も理想もないと批判し，それゆえに国立体育研究所は体育の基底を研究し，その現象を説明し，さらにその規範を与えてその方法を批判すべき立場になければならない，と言う。そして，体育問題に関する当時の唯一の研究所としての高師の体育科を意識して，高師の立場は，原理の研究批判よりもその原理をいかに実践するかの方法の研究と指導にあるのであり，したがって，原理の根本的研究と批判を研究所の任務としなければならいと言う。彼によれば，国立体育研究所の任務は哲学及び科学の任務であり，高師の体育研究の任務は応用科学の立場にあるべきものということになるのである。さらに，研究の名のもとに単に諸科学の研究態度を模倣するだけでは，体育研究の創造的研究方策を脱することになり研究所設立の意義を全く失うだろうとも述べ，生理学，解剖学は単なる医学的なそれではなく，体育生理学や体育解剖学でなければならないのだと主張する[13]。

実際には，井口らの主張と數川の主張のちょうど中間的な体育研究所ができたようである。研究所所長の北豊吉が『體育と競技』に，体育研究所について書いている。研究所は，解剖，生理，心理，病理，化学，衛生，細菌，教育，哲学等の研究室ならびに図書室や会議室などの附属施設ならびにヂムナジアム，トラック，フィールド，スイミングプールなどの運動施設を有し，事業としては「研究」のほかに，講習会，講演会の開催や運動のコーチなどの「指導教授」，運動施設の設計や組織の運営などについての「質疑応答」，そして「出版」が挙げられている。研究の方針として，本研究所においては大学のような純学問的機関と違って，一つの問題について総合的に研究し，学術的な研究のみならず一般社会で求められる通俗的な問題も取り上げるとしている[14]。

1933年(昭和8年)，体育研究所内に体育研究協会が誕生し，『體育研究』という本格的な研究誌が創刊される。体育やスポーツの合理的で効率的な実践や指導を目指す意識は，その理論・研究・学問といったかたちですでに存在していたのであるが，この『體育研究』創刊のころになると，それに対して「科学的研究」という言葉がはっきりと使用されるようになってくる。1926年あたりにも例えば「生理的解剖的心理的見地より科学的に体育運動と脳の機能の関係を究める[15]」といった「科学的」の用法が散見されるが，多くは哲学，特殊科学，応用科学などといった学問の一領域を名指しする言葉として単に「科学」が使われているにすぎない。ましてや具体的な問題になれば，生理学，解剖学，生化学などと言えば済むのであって，それらを総称して「科学的」と或る種のニュアンスをこめて呼ぶような習慣はほとんどなかったようである。ところが，『體育研究』の創刊号で，体育研究協会会長の山川建がその「創刊之辭」において体育の「科学的研究」の重要性を語っており[16]また，同じ創刊号に，東竜太郎

が「體育の科學的研究」と題し，科学的研究の重要性を宣伝することに対して科学的知識の限界を認識することの必要性を説く見識の高い批判的文章を書いている。その冒頭，東は，何事も科学的に研究し，科学の色彩を以て粉飾せねば気がすまぬのが現代の世相である[17]と述べているが，それは，「科学」をめぐって今日のわれわれの時代と共通する状況が，すでに遅くとも1930年代には存在していたことを示しているであろう。ここで言われている科学的研究とは，運動の医学的研究と心理学的研究をおおよそ意味している。さらに1936年（昭和11年）には織田幹雄の「陸上競技の科学性」といった文章が『週刊朝日』に載っており[18]，スポーツに関して「科学」といった言葉がかなり一般化していることを物語っている。

『體育研究』に掲載されている論文の特徴は，その多くが医学的な研究であるということである。吉田章信，東竜太郎，小笠原道生，安田守雄といった医学者に加えて，北海道帝国大学医学部内科教室，新潟医科大学生化学教室，日本医科大学整形外科教室，東京帝国大学医学部歯科学教室，名古屋帝国大学医学部衛生学教室，大阪帝国大学医学部内科教室，日本医科大学小児科学教室，京都府立医科大学生理学教室，日本医科大学第一内科教室の医学研究者たちが多数寄稿しているのである。例えば「筋行作（Muscular Activity）の生化学的観察－運動による血液及び尿成分特に乳酸の変化について」「同速度の歩行と走行に於ける酸素需要量について」「心臓機能検査法としての屈膝運動」「若きスポーツマンに見るオステオパチイ」「運動選手の運動前後に於ける尿及び血液中のヴィタミンC量の変化について」「高地スキー練習の赤血球沈降速度に及ぼす影響」などというように，最近のスポーツ科学特にスポーツ医学の研究と同様のタイトルの諸研究が並んでいる。おそらくスポーツ科学研究の実質的な誕生をこの『體育研究』の時期すなわち1930年代に見ることが可能であり，それは医学の一領域と言えるような様相を一部では呈していたのである。

しかしながら，『體育研究』は，大谷武一「体操科指導の要点」「シュトライヒェル博士の＜姿勢教育＞」，野口源三郎「最近のスタート及びスタートダッシュについて」「児童の走・跳・投の能力について」，本間茂雄「鉄棒の寸法と構造」「鉄棒の懸垂様式」といった指導や実践に関わる研究も同時に含んでいるのであり，体育やスポーツという対象を多くの研究方法がさまざまに取り囲むという，現在の体育学あるいはスポーツ科学の雑多な状況の原型がすでにここに見られることも確かである。東京帝大医学部の出身者を中心にした医学的な基礎研究をする人々と，東京高師の出身者で自らすぐれた競技選手でもあったいわゆる体育の指導研究をする人々といったグループがあり，科学的な研究の必要性の提唱とそれだけでは実践に結び付かないという反論もあり，体育学あるいはスポーツ科学といった学そのものの独自性が問われている状況は，今とそれほど変わらないであろう。ただ今と違うのは，ここで展開された諸研究を仮にスポーツ科学の曙と呼んでみたとしても，たいていの研究が学校を中心にした教育というコンテクストから生じていることと，競技力向上といった使命を匂わせるようなコノテーションを「科学」という言葉が持ちえていないことであろう。そして，研究所の名のもとに，異なる経歴とさまざまな経験を持った人々が集い，科学研究という共通の場を維持することができた，あたかも夢のような時代がこの1930年代であったのかもしれない。しかし，戦時体制がとられるとともに，それはやはり悲しい夢で終わらざるを得なくなる。研究部門と指導者養成は分断され，体育研究所は閉鎖される。この影を引き連れながら，スポーツ科学研究は戦後の日本体育学会へと受け継がれるのである。

(3) 日本体育学会の光と影

日本体育学会が誕生した頃の，次のようなエピソードに注目してみたい。それは，加藤橘夫が大谷武一先生の先見の明として語っていることである。

> 「・・・体育学の黎明期に大谷先生は東京体育専門学校や東京高等師範学校体育科の卒業生だけで体育研究組織を作るとすると，体育は体操を中心とした狭い分野に固まってしまう恐れがある。幸いに大学の中に体育が正課としてとりあげられ，各大学に体育の研究スタッフが置かれるようになったので，東京大学が先頭に立って学会創立の仕事をして欲しいというご意見を述べられた。[19]」

さらに，加藤は学会設立に至る経過として次のようにも書いている。

> 「昭和二十四年には全国各地において新制大学が発足した。それに伴い，大学基準協会で初めて正課としてとりあげられた体育も一つの科目として出発しはじめたのである。その夏，文部省では長野県菅平において新制大学体育研究協議会を催し，その機会に各地の大学体育担当教官が集合して，大学体育についての各種問題の研究を行った。その際，この協議会の第五分科会では体育の発展のためには全国的学会の設立が必要であるとし，次のような案を定め

た・・・[20]」

この学会設立の経緯は，今日の日本体育学会のあり様をすでに暗示している。学会設立の気運が高まりそれが現実化してくるのは，何と言っても，新制大学における体育の正課としての位置づけという出来事によるのである。学会設立を決めたのは大学の体育の教官であった。戦前の体育研究所の流れはどうなってしまったのだろうか。確かに戦後すぐに体育研究協会は復活し『體育研究』は1947年（昭和22年）に復刊した。しかし体育研究所の1930年代の流れがそのまま復活することはなかった。日本体育学会に先立って，1949年日本体力医学会が創設されるのである。体育学会設立の準備において，「日本体力医学会理事長の東俊郎氏に協力を求め，医学者の参加を希望する運びとなった。同会よりは友誼団体として協力すべき旨の快諾があり，且つ日本体育学会設立準備世話人として有志の医学者の参加を得た[21]」という。『體育研究』のもとで科学的研究の基礎を支えていた医学者とは離れて，「体育研究」が自立することになったわけで，その特別の意味を持った「体育研究」や「体育研究者」がここに誕生することになったのだ。それを支えた人々が，いわゆる「体育人」である。

この体育人というカテゴリーとエートスは，随分古くからあったに違いない。その重要な特徴の一つは，彼ら彼女らがたいていの場合，何らかの運動競技すなわちスポーツに堪能で，程度の差はあれそれを愛好しそれに没頭して青年時代を送った人々であることだ。スポーツの熱狂的な愛好者は世に多いであろうが，そのような若者の一部が大学の「体育」に進学してくる。かつてはその受け皿が高師の体育科だったりしたのだろうが，新制大学の設置とともにその受け皿は増強されることになった。体育学会の設立によって，そのような体育人が体育を研究する，否，研究しなければならなくなった。そこでの体育はもちろん教育概念のそれではなく，スポーツをもめぐる諸問題であるのは必然であった。加藤は言う。「体育的現実は種々の科学上より研究が進められたし，また今後進めることができるのであるが，各科学より研究がされる限りそれはあくまで当該の科学の立場に立つものであって，その限りにおいて体育研究としては，まとまりのない研究たるに過ぎない[22]」。あるいは「体育の研究は，そのテーマを選ぶ時，体育をより良くするという目的の意識が必要となる。純粋科学に属する学者はそれを笑うかもしれないが，私は体育研究をそのように考える。それの存在しない研究は，われわれ体育研究者の参考になし得ても，それ自体は体育研究とはいえない[23]」。加藤は，体育人たる体育研究者のエートスの見事な代弁者である。体育（スポーツ）を愛し，少しでもそれを良くしようという良心を持った人々が体育研究者なのであり，そういった人々が集う場が体育学会なのだ。科学的な研究の内容や種類にかかわりなく，このような茫漠たる「体育」という理念を共有しえる人々が学会に吸い寄せられるとすれば，その後の体育学会の膨張ぶりがうなずけるものである。

さて，体育やスポーツについての科学的な研究の基礎が医学的な研究によって作られてきたにもかかわらず，体育学会は体力医学会とは別に学会として自立しなければならなくなったわけであるが，容易に予想されるように，体育学会における自然科学的な研究のほとんどは，その研究水準が高まるにつれ，体力医学会と二人三脚のような歩みをしてきているのである。日本体力医学会が発行している『体力科学』の最新号によれば，体力医学会での研究発表は生理科学的研究とスポーツ医学的研究の大きく二つの領域に渡っており，心理学を除いた自然科学的なスポーツ科学のほとんどすべてをカバーしうるのではないかと思われるくらいである。この領域に関係するスポーツ科学者の多くは，体育学会と体力医学会の両方に所属して活動しているという。これほどはっきりした形ではないにせよ，このような二重構造はスポーツ科学の人文・社会科学的な研究でもすでに起こっている。こうした二重構造がいろいろな意味で維持できなくなるとすれば，研究の内容がこれほど細分化，専門化，高度化してきている今日，おそらく研究の実質の方が優先され，捨てられるかあるいは弱体化されるであろうと思われるのは，加藤橘夫らの古き良き体育人にとって枢軸であった，あの「体育」というエートス＝イデオロギーの方であろう。

今日の体育学会にせよ，体育の教員養成システムにせよ，あるいは大学での体育学・スポーツ科学の研究体制にせよ，もともとは特に戦後の諸々の制度によって規定されているものである。それは今日の現実を形成しているがゆえに，簡単に否定したり変更してみたりできるものではない。しかし，その制度に疲弊が見られたり時代の変化に即さない事態が生じている現実に直面するとき，この，そしてすべての制度が，或る意味では歴史の偶然の産物であったことに思いを寄せてみよう。そのような思いでスポーツ科学の誕生物語をつづるとき，筆者には気にかかる歴史上の出来事がいくつか思い当たる。その一つは，猪飼道夫が辿ったスポーツ科学者としての道である。

猪飼道夫は，改めて言うまでもなく，運動生理学，スポーツ医学の大家であった有名人で，戦後のスポー

ツ科学の発展に貢献した重要な人物の一人である。東京帝国大学の医学部を卒業しており，その経歴だけから言えば，東竜太郎，小笠原道生といった人たちに連なる。しかし，東や小笠原がボートや野球の選手という自らの体験を持ちつつスポーツ科学に関心を寄せていったのに対して，猪飼は，競技能力にはめぐまれないあわれな生徒の一人であったと自ら告白している[24]ように，スポーツに対しては科学的に分析を試みる医学者という接し方に徹した人だった。彼がスポーツ科学に関わるようになったきっかけは，彼の指導教授福田邦三のもとで学んだことである。福田は1937年(昭和12年）から1957年（昭和32年）まで，東大医学部生理学教室第一講座の主任教授であった。彼のもとでの講座の研究課題は，(1)循環生理学(2)心臓機能(3)血液凝固(4)色盲色弱(5)味覚(6)人類生態学(7)スポーツ生理学であり，ここで猪飼はスポーツ生理学に接することになったのである。1957年福田の退官後，松田幸次郎が主任教授となるが，そのときスポーツ生理学は課題から消える[25]。そして，同年，猪飼は東大教育学部の教授となるのである。

思考実験が許されるとして，もし，福田－猪飼の継承が東大医学部でなされていたとしたら，ひょっとしたら医学部にスポーツ医学の講座ができていたかもしれない。そうすれば，おそらく，1930年代の体育研究所におけるスポーツ医学研究を引き継ぐようなかたちで，各大学の医学部につぎつぎとスポーツ医学関連の講座ができていただろう。健康の維持増進を基軸にしたいわゆる予防医学の領域が着実に根をおろし，健康保険証が病院での治療だけでなく，フィットネスクラブでの健康運動の実践をカバーすることになっていたかもしれない。また，全国各地のスポーツトレーニングセンターには，スポーツドクターが常駐し，スポーツ医事相談といった業務を展開していたかもしれない。そのようなことになっていたとしたら，明治の当初からあった体育という理念は様相を異にし，体育やスポーツに対するイメージは随分違ったものになっていただろう。あるいはさらに，スポーツ医学は今と比にならぬほど権威ある知として編制され，基礎と臨床という医学的な知の内部の軋轢を，先鋭化された形で体現していたかもしれない。現実はそんなふうにはならなかったが，その理由を推測することは容易ではない。ただ確実に言えるだろうことは，やはり戦争への突入と戦争による中断，そして戦後の全く新たな立て直しといった一連の事態が，今われわれが有している現実の方向を定めたことである。戦後の教育制度の改革が米国のシステムをモデルになされたことも無視しえぬ要因であろう。

戦後，大学の正課に体育が位置づけられたとき，体育関係者は誰もが喜んだ。そして学会もでき，学問的にも自立し，その学問は間違いなく発展を遂げ，社会的な評価や期待も確かに高まった。それは幸いなことであった。しかし，その学会とは体育学会なのであり，言葉のコノテーションや歴史的な因縁を洗い流してみれば，スポーツ科学はやはり自立してはいないのだ。これは単に学会の名称変更云々の問題なのではなく，われわれが伝統的に受け継いでいる体育観やスポーツ観を左右する問題である。歴史的系譜を辿るわれわれのスポーツ科学誕生物語も，こうして，ようやく最初に取り上げた『スポーツ科学講座』の頃まで辿り着いたことになる。

(4) スポーツ科学という名の共同幻想

『スポーツ科学講座』から約十年後，同じ出版社が『講座・現代のスポーツ科学』（全8巻，大修館）を企画する。それは前者と違って，スポーツ科学の学問としての性格を明らかにすることを意識した総論的な『スポーツの科学的原理』を第一巻に置いている。その第II章が岸野雄三の「スポーツ科学とは何か[26]」という論文である。岸野は，すでに1974年に「スポーツ科学とスポーツ史[27]」というスポーツ科学の全体的な輪郭を理解しようとする論文を書いているが，これらの岸野の研究は，スポーツ科学の研究対象と学問的方法を明確にしようとするもので，科学論まで考慮したスポーツ科学論であり，本稿も含んだ一連の研究が目指そうとするスポーツ科学論のさきがけ的な研究である。この『講座・現代のスポーツ科学』の背景には，その「まえがき」にあるように，研究対象が教育的諸現象を越えて拡大化され，それに応じて体育学あるいは体育科学からスポーツ科学への移行が起こっているという学問全体の大きな動きがある。

それではスポーツ科学とは何か。岸野の指摘を俟つまでもなく，スポーツを科学的に研究する分野がスポーツ科学である。それは教育としての体育という領域もスポーツ教育学という形で包含するのであり，スポーツをめぐる諸科学の総称としてのスポーツ科学という名称は，広義や狭義の体育概念を考えなければならなくなってしまう体育学といった呼び方よりも，論理的には妥当である。国際的にも「体育」といった用語は使われない方向に進んでおり，それに代わってスポーツ教育，そして学問としてはスポーツ教育学であり，それはスポーツ科学の一領域と位置づけられるわけである。わが国でもそういった動きを受けて，体育学会の名称問題が議論されている。体育学会からスポーツ科学会あるいはスポーツ学会へ，というわけだ。しか

し，数年前にこの名称変更を実行する機会が訪れた際，学会の総会はそれを否決した。それにはさまざまな理由が考えられるが，やはり何と言っても，歴史的系譜の中に観察された「体育」をめぐるエートスがその大きな要因なのではないか。問題は論理ではないのだ。個別の領域としては「バイオメカニクス」（このカタカナ名称から「体育」はどのようにしても浮かんでこない）の科学者が，全体を統括する学会では「体育」を捨てることができず，「どんなに科学的なことをやっても，自分は体育の人間だと思っているし，体育が好きだ」などと語ってしまうのだ。そういった「体育」という共同幻想に裏打ちされたスポーツ科学が現実なのである。

確かに岸野の言うとおり，かつては学問の世界でスポーツといった言葉を使うことはタブーであり，いきなりスポーツ科学などと言い出すことは不可能であっただろう。しかし，その後の「体育関係者」の学問的な努力と，スポーツそのものの価値が社会的に認知されてきたことが相まって，ようやく1960年代頃からスポーツ科学といった名称が一般的に使われるようになったのである。タブーがタブーでなくなったにもかかわらず，スポーツ科学者たちは「体育」を語ってしまうし，みずから「体育」の専門家と称して，スポーツ科学に基づいた「体育」の指導をしてしまうのだ。ここにスポーツ科学と指導などの実践との深い結び付きを善と考える幻想がある。もちろん，スポーツの指導や健康つくり運動に対するアドヴァイスがスポーツ科学者に求められ，それに真摯に答えることが重要であることは明らかである。しかし，スポーツ科学者が自らの学問的営為を反省するときのエートスが，加藤橘夫らの時代と何も変わっていないのではないか。加藤が純粋科学者に対して「笑うことなかれ」と自らをピエロのように語ったエピソードを先に紹介したが，本稿で見たような系譜を持つ「体育学」という制度が出来上がってしまった今日，もはや加藤のことを冷ややかに笑うことはできない[28]。

その系譜の延長上に，スポーツ科学のアイデンティティの問題があるだろう。スポーツ科学，スポーツ・サイエンスという言葉に対して，多くの人々は自然科学的な響きを強く感じていることを，岸野は指摘している[29]。歴史的系譜からしてもその中核はスポーツ医学であり，一般的なスポーツ科学のイメージにおいては，生理学的，力学的研究，それに心理学的な研究を加えた一群が，おおよそスポーツ科学の内実である。その課題は，スポーツの競技力向上，一般人の健康，体力の問題，特に昨今の社会情勢を反映して生涯学習としてのスポーツ活動，あるいは高齢者や障害者の健康の問題などが中心であって，猪飼に言わせれば，（特にスポーツ医学は）人間の生存と活動のための必須の科学である。そして，このような問題に取り組んでいるスポーツ科学者が，教育や体育の問題も無視してはいないというポーズをとろうとするのは先に見たとおりである。猪飼もまた「教育生理学」について語ろうとしたのであった。

一方，体育史，スポーツ史が専門の岸野は，「科学」という語の原意に立ち返ってスポーツ科学を見直してみる必要性をとなえ，人文・社会科学をも取り込んだ総合科学としてスポーツ科学を規定しようとする。スポーツ哲学，スポーツ教育学，スポーツ史，スポーツ社会学，スポーツ心理学，スポーツ生理学などの専門諸学を総合化したものがスポーツ科学だというわけである。こういったアイディアに対して，生理学の研究者たちの間から反対の声が挙がることはないであろう。むしろ，そのとおりだという賛同と，スポーツ科学の総合化，体系化をはかる要望が表明され，その原理的な仕事をスポーツ哲学などに求める声が出されるのではないだろうか。このようなスポーツ専門諸学の一体感とそれに基づく統合といった発想を前にするとき，筆者は，やはり先に見たような日本体育学会誕生前夜の団結と前進を期する一つの旗のもとでの人々の紅潮した顔，顔，顔を想像し，そこにあの「体育」のエートスが健在であることを思わずにはいられない。研究の実質を考えれば，スポーツ哲学からスポーツ医学に至るまでの諸学問を貫いて共通に言えることは，おそらく，スポーツと呼ばれる社会・文化現象とそれに含まれる人間の身体運動そして広くそれらに付随することがらに対して，それぞれにまなざしを注いでいることと，その対象に対して広く研究とか学問といった営みをなそうとしていること，くらいではないだろうか。いや，それぞれに方法は違ってもスポーツなどのさらなる発展・普及を念願している点でわれわれは同志なのだという良心＝幻想が，スポーツ科学という世界を生み出している。そうだとすれば，総合科学とは何かなどといった問題を真剣に検討して，スポーツ科学の体系を構築しようという試みは徒労に終わるほかない。また，しばしば安易に夢見られるようなスポーツ科学独自の学問・研究方法などというものも幻想でしかありえない。誤解を恐れて付け加えたいが，ここで言われている共同幻想ということは，無知蒙昧から生じるいわゆる幻想のことではなく，簡単に排除されるべきものなどではない。それは，歴史的系譜において見られたように，今日のスポーツ科学につながるような体育学を生み出すためにどうしても必要なものであったのだ。

4．エピローグ

最後に，本稿全体を簡単にまとめてみれば，本稿で指摘されたことは，①スポーツ科学といったことが語られる場合，それはスポーツや科学が持っているイメージや神話を作動させてしまうこと，②わが国においてスポーツ科学という語が一般に使われるのは，1960年代以降であるが，スポーツや身体運動を科学的に分析しようとするまなざしはすでに1900年頃から見られ，特に1930年代において科学的な知の編制は一挙に進み，しかもそれは医学の一領域であったこと，③現在のスポーツ科学という学問領域は，体育学研究という系譜から生まれているのであり，そこに見られた「体育」という理念＝イデオロギー＝幻想は，今日に至るまで健在であること，である。ところで，このような歴史的系譜をふまえ，これからのスポーツ科学は一体どのようになっていくのだろうか。スポーツがいろいろな意味で社会的な評価を獲得している現在，もはや体育という理念でスポーツの地位を保持することは必要性を失い，それぞれの学問領域における研究対象，問題の設定に応じて，いわゆるスポーツ科学の枠までをも超えて研究のプロジェクトが組まれていく動きが一層強まるであろう。一方で，体育学－スポーツ科学という制度を維持していくために，「体育」という理念が強化されたりあるいはそれに替わる何物かが発見・発明され，社会的に宣伝されていくであろう。そして，体育やスポーツの地位を，体育学やスポーツ科学の学問的評価で引き上げるという幻想も終息し，快楽としてのスポーツ科学の基礎研究が一般化し，実践との関わりを強く求める領域では，従来のいわゆる科学的手法という形式を突き崩した知のあり様が模索されるであろう。そして，こうした時代の急速な流れを敏感に受けとめることができないスポーツ科学者たちが，相変わらず古き良き体育人を演じていくことになるのであろう。

註

（紙面の都合上，最小限に止めた）

(1) 拙著「スポーツ科学論序説：（Ⅰ）序論」『広島大学　教育学部紀要』第二部第43号，1994，135-144頁。

(2) 木下秀明『日本体育史研究序説』不昧堂，1971，257頁以下。

(3) スポーツを芸術とみなそうとする試みがその一つに挙げられる。拙著『遊戯する身体』大学教育出版，1994，147-201頁，および拙著「芸術と非芸術－魔術的なアートとしてのスポーツ」『諸芸術の共生』渓水社，1995，403-415頁，参照。

(4) 佐藤忠男「体育・なぜ？」『新体育』第46巻第9号，1976，12頁。

(5) 拙著「スポーツの＜隠れた次元＞と美意識」『体育の科学』第44巻第11号，1994，899-902頁，参照。

(6) 今村嘉雄「漫才化したスポーツ」『新体育』第30巻第9号，1960，8頁。

(7) バルト（篠沢秀夫訳）『神話作用』現代思潮社，1967。本稿では「神話」「イメージ」といった概念そのものを理論的に取り上げることをせずに使用しているが，その背景にはバルトの神話学やコノテーション論，フーコーの系譜学，ブルデュのハビトゥス論がある。

(8) 猪飼道夫ほか「座談会：スポーツ科学の現状と将来－『スポーツ科学講座』（全10巻）の完結を記念して－」『体育科教育』第14巻第4号，48-57頁，同第8号，54-61頁，1966。

(9) 木下，前掲書，60-72頁。

(10) 竹之下休蔵『体育五十年』時事通信社，1950，56-58頁。

(11) 同書，129頁。

(12) 井口あくりほか『體育之理論及實際』國光社，1906，450-451頁。（『近代体育文献集成』第五巻）

(13) 數川與五郎「國立體育研究所に希望す－現今の體育諸問題と其の解決方策及國立體育研究所の研究内容提案－」『體育と競技』第2巻第9号，1923，8-18頁。

(14) 北豊吉「體育研究所に就て」『體育と競技』第4巻第2号，1925，88-92頁。

(15) 下津屋俊夫「心理學的力學より見た體育と思想」『體育と競技』第6巻第1号，1926，29頁。

(16) 山川建「創刊之辭」『體育研究』第1巻第1号，1933，1-2頁。

(17) 東竜太郎「體育の科學的研究」『體育研究』第1巻第1号，1933，127-128頁。

(18) 織田幹雄『世界記録を目ざして』御影文庫，1948，223-231頁。

(19) 『加藤橘夫著作選集第一巻』ベースボール・マガジン社，1985，174頁。初出は『体育の科学』1979年12月号。

(20) 同書，134頁。初出は『体育の科学』創刊号1950年12月。

(21) 同書，135頁。

(22) 同書，137頁。

(23) 同書，163-164頁。初出は『体育の科学』1956年1月号。

(24) 『猪飼道夫随筆集』ベースボール・マガジン社，1973，149頁。

(25) 『東京大学百年史部局史二』東大出版会，1987，43頁。

(26) 岸野雄三「スポーツ科学とは何か」『講座・現代のスポーツ科学第一巻　スポーツの科学的原理』大修館，1977，77-133頁。

(27) 岸野雄三「スポーツ科学とスポーツ史」『体育学研究』第19巻第4・5号，1974，167-174頁。

(28) 清水義範の小説集に『体に悪いことしてますか』（祥伝社，1995）がある。それに収録されている同名の小説で描かれているスポーツ医学者とテレビ・キャスターのやりとりこそ，大衆文化の方向を左右するマスコミとそれに巻き込まれているスポーツ科学といった事態を鮮明かつ象徴的に示しており，われわれがまさに正しく笑うべきエピソードである。

(29) 岸野，「スポーツ科学とは何か」85頁。